

# 「西陣織」異業種と再生

## 生地之余りからバッグ 炭素繊維で車の内装材

西陣織の生地之余りをつくったショルダーバッグ



京都の伝統産業「西陣織」で、異業種と連携し新商品の開発や販路開拓をめざす動きが広がっている。不要になった生地で作るバッグや、先端素材の糸で織り上げた車の内装材などを開発。平安時代から続く伝統に現代の要素を加えて需要を掘り起こし、長い低迷からの脱出を図る。

### 現代の要素加味

掛け軸用の生地を製造する岱崎織物（京都市、山崎清一郎社長）はテント製造の太陽工業（大阪市）と共同でショルダーバッグを商品化した。掛け軸用に生地を裁断した後に残る余りを活用する。太陽工業の技術を用いた生地上に樹脂フィルムを熱で圧着。表面は水をはじき、汚れがついても簡単に拭き落とせるのが特長で、「和たんく」の

### 地域スコープ

商品名で年内にも売り出す。長さ100以上の反物か

ら出る2〜3倍程度の余りの生地で、3〜4個のカバンを作る。残り生地を使うため、大量生産品とは違う多様なデザインの商品を品ぞろえできるという。価格は1万5000円前後を想定。太陽工業が販売し、年5000個の販売を見込む。

織物製造のフクオカ機業（京都市、福岡裕典社長）は工業デザインのアシヤム（京都市）と組

み、京都大学発ベンチャーが開発中の電気自動車向け内装材を開発した。炭素繊維の糸を西陣織の技術で織り上げ、助手席側のダッシュボードに張る。炭素繊維特有の黒っぽい色は残るが、着物や帯の柄のような和風のデザインに仕上げる。

着物や帯地を製造する秦流舎（京都市、野中健二社長）は岡山県倉敷市のデニム生地メーカー2社と協力し、「デニム素材の着物」でにむどすを製作した。裾や襟など所々を色落ちさせ、長年着古したような風合いを再現。色は黒や白、水玉柄などをそろえた。価格は3万1500〜5万6700円で、専門の販売店も京都市内に開設した。

伝統織物同士の連携も始まっている。西陣織メーカーで構成する西陣織工業組合（渡辺隆夫理事）は本場奄美大島袖協同組合（都成俊一郎理事長）との交流事業を本格化。大島紬と西陣織を組み合わせた新商品の発表会を11月に開催した。鹿兒島県奄美市の婦人服店、クチュール蘭（本田涼子代表）が、裾の一部に西陣織の生地を使うドレスを製作。価格は約20万円からで、12月中旬以降、東京都内での販売も計画する。

# 出荷額、90年の5分の1



## 「着物以外」が浮揚のカギ

消費者の着物離れや節約志向など、西陣織の置かれた現状は厳しい。西陣織工業組合の推計では、出荷額は1990年をピークに減少傾向が続き、2008年には5分の1程度まで縮小した。廃業に追い込まれる業者も多く、90年代初めまで1000社を超えていた

組合の会員数は500社を割り込んだ。

こうしたなか、京都府や和装団体が着物姿の人を対象に、寺社、博物館の入場料を割り引くサービスを導入。市内の一部タクシー会社も着物客の運賃を値引きするなど、「オール京都」で地域を代表する伝統産業の復興を後押ししてきたが、現在のところ目立った効果は出ていない。

浮揚のカギを握るのはやはり、メーカーの自助努力だろう。消費者の注

意を引きつけるような商品づくりや、着物離れに対応した和装以外の用途開発が不可欠だ。京都工芸繊維大学大学院の浜田泰以教授は「新しいアイデアを取り入れ、着物以外の用途を積極的に開拓すべきだ」と話す。西陣織の原型は平安時代に朝廷が職人を集めて

始めた高級織物。室町時代の応仁の乱で、戦火を

逃れた職人が西軍の本陣跡（現在の京都市北西部）で生産を再開し「西陣織」の名がついた。1200年余り続く伝統産業に新風を吹き込めるか。伝統の担い手たちの知恵と工夫が問われる。